

栗原先生を送る

三橋 秀彦

出会いの時の印象ほど鮮明なものはない。栗原先生と出会ったのは大学院修士課程の在学中、学会で初めて報告を行った日本労働社会学会の研究会の席だった。それはその年の6月に起きた天安門事件の影響で留学が中断し、予定していた調査も出来ず帰国となり、所在なげに過ごしていた私に大学院の恩師が与えてくれた場でもあった。「こちらがゼミの先輩の栗原先生」「彼が三橋君。社会学だけど中国が専門」そんな遣り取りであった気がする。それからほぼ10年近くが経過し、その後縁あって1998年に本学に採用されることになった。

私が2001年に北京でフィールド演習を始められたのも、栗原先生あってこそである。演習計画を作ると、教学課から「文部省の規程上、現地での演習は教室の授業の3倍時間数が必要」と言われ、「そんな大変なの好き好んで誰がやる？だから誰もやらないのだ！前例のないことは学部には逆に迷惑？」そう思い悩む私に、当時教務委員長であった栗原先生は陰に陽に励ましてくれた。「教務委員長が言うのだから」と始めた試みである。

それから1年経った2002年5月のある日、栗原先生から「今度、「アジア夢カレッジ」という中国プログラムを始めることになったが、やってみないか」の誘い。それから「アジア夢カレッジ」一筋20年。途中、多文化コミュニケーション学科の開設を経て、今に至っている。

「アジア夢カレッジ」の「夢」は、「学生の夢」、「大学の夢」、「アジアの

夢」。これは初代委員長の鯉淵先生が常々学生に語っていた言葉である。鯉淵先生が夢を語り、栗原先生がそれを設計図に落とし込み、それをプログラムに参画する教職員が形にしてゆく。教職員に加えそこに企業関係者が加わるなど、「アジア夢カレッジ」は強烈な個性と想いを持った役者が、まさに「同床異夢」、それぞれの夢に基づき学生達を教育していった。それでも「アジア夢カレッジ」がプログラムとして一定の一貫性を維持しえたのには、栗原先生の存在が大きい。とりわけ開設以来、決して順風満帆とは言えなかった時々の日中関係の下、「アジア夢カレッジ」が20年近くプログラムとして継続、発展しえたのは、その時々の学長と「アジア夢カレッジ」との間に立って調整した栗原先生の指導者として見識と能力あってこそであった。海外インターンシップ、中国語という英語以外のアジア言語の教育。こうした「アジア夢カレッジ」での経験は、その後多文化コミュニケーション学科における実践として広がって行った。

多文化コミュニケーション学科開設の年に採択された「グローバル人材育成推進事業」は、副学長であった栗原先生が構想責任者、学部長であった永綱先生が実施責任者として採択されたプログラムである。以下、当時の臨場感を伝える遣り取りを紹介してみたい。

「皆さま。先ほど文部科学省から連絡がきました。本日18時に公表されます。」(西川国際交流課長(当時))「いよいよですね。(中略)忙しい日を迎えることになろうと思いますが、それはそれとして、一度、祝杯を挙げる機会を設けたいと存じます。夢カレッジとの関係もありますので、いずれこちらとの関係者とのすり合わせも必要でしょう。3日の晩には鯉淵先生を囲んで西澤先生、石川先生、遊川先生、三橋先生と一緒に、今回のプログラムの趣旨と夢カレッジの在り方について話をする予定でいます。夢カレッジを全学の大きな動きを踏まえて考えていただくことが必要と思っています。」(栗原先生)

またその後届いたグローバル人材育成推進事業の審査結果評価表は次の言葉で始まる。「本構想は、大学のミッションであるアジア融合に寄与する人

材育成に焦点を当てたプログラムであり、中国、韓国、ASEAN に目を向けた「行動力あるアジアグローバル人材」の育成に向けて、アジア夢カレッジ等これまでの実績に加え、開設された多文化コミュニケーション学科の経験が生かされた取り組みである」。

栗原先生の研究領域は社会学でもコミュニケーション、情報化、グローバル化、若者と多岐に渡る。ただ私にとってイメージの中心はドイツ社会学であり、特にフランクフルト学派の第二世代の代表的研究者である Jハーバーマスである。Jハーバーマスは公共性、コミュニケーション研究で知られ、その著書の一つは日本でも『近代 未完のプロジェクト』と訳され、2000年に岩波書店から出版されている。

「夢カレッジを全学の大きな動きを踏まえて考えて頂くことが必要と思っています」。この言葉は今でも脳裏を離れない。その意味で私にとっての「未完のプロジェクト」である。

折角 30 年以上も前に知り合ったゼミナールの先輩でありながら、このように栗原先生との思い出は個人的なものは少なく、紀要における栗原論文のレフェリーがすべて（？）回ってきたことを除くと研究者としてのそれでもなく、ほぼ学部や「アジア夢カレッジ」など仕事に関するものばかりである。私の本学着任後の多くの時間、栗原先生は教務委員長、副学長と大学の要職にあったとの理由以外に、それは共通の仕事として取り組んだ「アジア夢カレッジ」「多文化コミュニケーション学科」「グローバル人材育成推進事業」といった業務に個人間の友誼を超えるその時々の意味があったが故と考えたい。

ただ実に勿体なかったというのが今となっては正直な思いである。送る言葉に相応しい個人的思い出が蘇るためには、どうも仕事から解放され、感情が凍解してゆく時間を必要とするようである。

それでも一番印象に残っているのは 2004 年の「アジア夢カレッジ」の一年次の諏訪合宿で見た、楽しそうに学生を連れ回る栗原先生の姿である。長年の副学長職を終えた後の教育を楽しむ姿もそれに重なる。